

Title	近世に於ける西洋地理学：その史的素描
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1940
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.34, No.6 (1940. 6) ,p.787(41)- 814(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19400601-0041
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19400601-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

斯く國防經濟的再生産理論は以上の如き構造變化を示すのである。そして斯かる構造規定を前提し、その下に於て如何に資本の再生産過程が構成されて行くかを研究しなければならぬ。これが次の機會に吾々に課された研究課題である。

近世に於ける西洋地理學

—その史的素描—

小島 榮次

一 海上發見時代

西洋地理學史上の近世は、第十五世紀前半に於ける葡萄牙の親王「航海者ヘンリー」の活躍を以つて始まる。即ち彼の命令の下にアフリカ西海岸を南下した數多の探險隊が、次第にその行動範圍を擴大して一四四五年にヴェルデ岬に達し、一四七一年には赤道を横切り、ヘンリー死後一四八五年に至つて Diego Cão がコンゴ河口に到達、更にその二年後には Bartolomeo Diaz が喜望峰に達して居る。これ等の海上探險は遂に一四九八年の Vasco da Gama に依る印度半島西岸到着を以つてその目的の完成を見たし、更に西方洋上に向つては一四九二年の Cristoforo Colombo (又は Christopher Columbus) の西印度發見に導き、こゝに第十七世紀中葉まで凡そ一世紀半にわたる華々しい大發見時代を齎した。盲目的な傳統固執の態度はその影を著しくうすくし、觀察と經驗を重んずる風潮が支配するに至つた。コロンブスが地上の樂園を信じたといふ事實の如く、また航海者ヘンリー時代、葡萄牙人海上探險の

主目的の一つが司祭王ジーンの國——當時に至つてそれがアビシニアなることが信ぜられた——への通路發見にあつたといふ事實の如く、當時の主要人物の間にも未だ中世的精神の殘存するのを見るとは云へ、明かに時代は一變したのであつた。

これ等の海上探險を刺戟した主たる要因は、云ふまでもなく異教徒土耳其人に依る印度への陸上貿易路遮斷であるが、他方斯かる海上探險を可能にしたものは航海術の進歩であつた、而してこの航海術の進歩は、中世末期から既にかんりの程度に達して居たのであつて、即ち羅針盤は一二世紀の文献に當時の歐洲人が使用して居たことが明らかである (C. Raymond Beazley, *The dawn of modern geography*. Vol. III, Oxford, 1906. pp. 508-511. 参照) 一三世紀頃から所謂 Portolano 圖と稱する海圖が製作使用され、航海は著しく安全確實さを増して居た。ポルトラノ海圖は主として地中海沿岸の局部的地圖ではあつたが、その當時の一般地圖に比すれば遙かに詳細正確なものであつた。(Ibid., pp. 511-529. 参照)但し當時の一般地圖も著しく進歩して居た。中世後期の地圖は、地上の樂園が記入されたり主要寺院の建物が圖示されたり、時としては Hereford 地圖(一二世紀末)の如く遠隔地に棲息する魍魎の姿を描いたり (J. K. Wright, *Geographical lore of the time of the Crusades*. New York, 1925. pp. 277-8. 修正版地理學講座、小野鐵二著、地理學發達史、昭和十二年刊、六八九頁参照) 不正確極まるものであつた。一五世紀初頭にポトレマイオスの地圖が歐洲人の眼に復活して以來地圖は急速に進歩し、Regionontanus(又は Johannes Müller 一四三六—七六年) Martin Behaim(一四三六又は五九年頃—一五〇七年) Fra Mauro, (Toscanelli

da Pozzo (一三九七—一四八二年)等の學者に依り優秀な地圖が製作され、ベハイムは一四九二年に地球儀すら作つた。然しポトレマイオスの地圖に於ける重大な誤りは、誰もこれを訂正するものはなかつた。これはコロンブスをして確信を抱かしむるに至つた主なる要因の一つと考へられる。

羅針盤及びポルトラノ海圖に加へて更に一五世紀に入ると、「アストロラープ」又は四分儀に依つて北極星又は太陽の高度を測定し、大洋中央に於いて自己の位置する緯度を知る方法が一般に實用されるに至つた。且つまたコロンブス當時までには磁針の誤差も一般に認められて居たらしい。唯經度測定方法は未だ極めて不完全であつたが、上記各方面の進歩に依つて、遠洋航海が著しく安全確實となつたことは云ふまでもない。(George H. T. Kimble, *Geography in the Middle Ages*. London, 1938. pp. 221-40. 参照)

斯くしてコロンブスに續いて Giovanni Gabotto その他多數の探險家が陸續と北・中・南米を訪れ、その海岸線や内陸が漸次明かにされて行くと共に、東方へ向つては Ferrão Perez d'Andrada その他の葡萄牙人が一六世紀半頃までに支那及び日本へ到達して居る。而してその以前既に一五二一年には Magellan (又は Magalhães) が南米南端から太平洋を横断して比律賓に達し、事實上世界一週の可能性を立證した。その後約一世紀の間は Willem Barents の北極探險(一五九四—一五九六年) Martin Frobisher, John Davis, Henry Hudson 等に依る「北西航路」探險(一五七六—一六一六年) Abel Jansen その他の和蘭人に依る濠洲探險を始め、世界各地に重要な探險旅行が行はれた。

凡そ一〇〇〇年間にわたる中世の全時代を通じて狭い範囲内に局限されて居た歐洲人の地理的知識は、その二〇〇年程の間に一舉に全世界に及ぶに至つた。勿論大陸内部や兩極地方等、まだ探險の及ばぬ地方は多く残つて居るが、世界の球體なること或は少くとも赤道附近が圓筒狀をなせることが實證され、熱帯に人類棲息不可能といふ古代中世の妄説も打破された。世界の水陸分布状態の如きも、古來好んで思辨的考察の對象とされたのであるが、今や實際の觀察に依つて大略これを知り得るに至つた。

地理學もこの間に長足の進歩を遂げた。それは先づポトレマイオスの地理學復興から始まつた。一五世紀後半から一六世紀中葉までにこの古典の註釋本が多數出版され、夫々その當時の新知識を以つて補足されて居た。これ等と並んで Martin Waldseemüller(凡一四八〇—一五二二年頃)の *Cosmographiae introductio*(一五〇四年) Petrus Apianus(又は Bienewitz 一四九五—一五五二年)の *Liber cosmographicus*(一五二四年) Sebastian Münster(一四八九—一五五二年)の *Cosmographia universalis*(一五四四年)等の重要な著作が現れた。ヴァルトゼーミュラー及びミュンスターはストラボンに倣つて地誌的記述を主とし、アピアヌスはポトレマイオスに倣つて各地點の位置決定に重きを置いた。殊にミュンスターの著書は、當時多くの外國語に譯され多數の版を重ねた。然しその敘述は歐洲殊に獨逸に就いて特に詳しく、他の世界各地は簡單に取扱はれて居る。海上諸發見に伴ふ新しい知識は、これ等學者にはまだそれ程豊富ではなかつたと見える。これは當時の探險航海が主として經濟的乃至政治的的使命を持つて居たことから肯かれる。例へばヴァルトゼーミュラーが、航海記を著して令名の高かつた Amerigo Vesputi(一四

五一一—一五二二年)を新大陸の發見者としてその名を新大陸に冠すべきことを前掲 *Cosmographiae* 中に提唱した如き、一つには海上探險に就いての正確詳細な報告が、數多く現れて居なかつた爲めかと思はれる。(Konrad Kreschner, *Geschichte der Geographie*. Leipzig, 1923. S. 101 参照) 然し乍らこれ等の著者が古典復興と共に常に新知識を以つてそれを補足するに努め、觀察乃至測定に重きを置いたことは、確かに中世の影響から解放されたものと云ふべきであらう。地理學者が Leonardo da Vinci(一四五二—一五一九年) Nicholas Copernicus(一四七三—一五四三年) Galilei(一五六四—一六四二年)等の大科學者を輩出せしめた自然科學界の風潮に影響されたことは當然であらうし、海上探險の進行と共に古代中世の思辨的な地理學の缺陷を益々著しく感ずるに至つたであらう。斯くして地理學史上の近世を以つて、海上探險時代に始まるとする十分な理由が存在する。

然し乍ら前述の如く海上探險の目的が主として經濟的・政治的方面にあつたが故に、それ等に依つて學術的資料の齎されることが比較的少く、従つて地理學の進歩はむしろ緩慢であり、海上探險の進行に追隨し得なかつた憾みがある。斯くしてその時代を通じてポトレマイオス註釋本及び前記アピアヌス及びミュンスターの著書が地理學界を風靡し、これに對抗する重要な著作の現れることなくして一七世紀中葉に及んだ。而してこれ等二人を始め多數の地理學者が獨逸に輩出し、地理學の中心は今や伊太利を離れた觀がある。

地圖製作は海上探險の影響を受けて劃期的進歩を見た。ヴァルトゼーミュラー・ミュンスターの他に、コロムブスの乗船 Santa Maria 號の所有者 Juan de la Cosa 等の世界圖は、ポトレマイオスのそれに基礎を置くものではあ

つたが、新知識に依つて修正を加へられ遙かに精密なものであつた。例へばドゥラッコサの世界圖(一五〇〇年)は、コロンブスの第一航海・ガボットの加奈陀探險・ダマガマの印度航海の結果を収載して居り、ヴァルトゼーミューラーのそれは(一五〇七年)亞細亞と新大陸とを判然分離せしめて居る最初の世界圖であつた。而してこの頃地圖製作は次第に専門的職業となり、殊にニュルンベルクや和蘭諸都市に多數の業者が繁榮した。就中著名なのはGerardus Mercator (又は Gerhard Kremer 一五二一—一四九四年)で、彼は在來の文献を涉獵し且つまた自身廣汎な地域に亘つて旅行をなし、始めてプロトマイオスの影響を脱した地圖を作つた。一五五四年の歐洲圖は地中海の長さを從來の地圖よりも五三度短縮し、一五六九年の世界圖は航海用に最適の所謂「メルカトル投影法」の下に作られて居る。また當時始めて地圖帖が出版されるやうになり、先づメルカトルの友人 Abraham Ortelius (Ortel 一五二七—一五八四年)の *Theatrum Orbis terrarum* (一五七〇年)が現れた。またメルカトルの諸作もその死後一五九五年に一冊の圖帖に集録され、始めて「アトラス」なる名稱の下に出版された。オルテリウスの圖帖は五三枚の銅版彫刻に依る地圖を含んで居たが、メルカトル圖帖はその子孫の作品に依つて補足され、一六五三年に Jan Jansson (一五九六—一六六四年)に依つて出版された時には四五一枚の地圖を含むに至つた。斯くの如き地圖製作業の興隆に對しては、當時の印刷術進歩の貢獻を見逃すことが出来ない。即ち從來は手寫又は木版彫刻に據つて居たのだが、銅版彫刻が實用化されるに及んで始めて緻密な圖の大量製作が可能となつたのである。

二 近世地理學成立の準備時代

Bernardus Varenius (又は Bernard Varen 一六二二—一七〇五年)の *Geographia generalis, in qua affectiones generalis telluris explicantur* (一六五〇年)の刊行から一八世紀末に至る約一五〇年間は、近世地理學成立期への準備が各方面の華々しい努力に依つて進められた時代である。

先づ地理學の體系に對する考察がワレニウスに依つて行はれた。彼は僅か二八歳の短命であつたが、その著書に於いて博く古代中世にわたり數多學者の所説を涉獵すると共に、最新の資料に基いてこれを確證することに努力した。然し特に重要な點は、一つの學問としての地理學の體系づけが彼に依つて始めて行はれたことであつた。即ち彼は地球を全體として考究する「一般地理學」と、一地域に於ける諸現象の總體を研究し描寫する「特殊地理學」とを區別した。一般地理學は更に分つて絶対・相對・比較の三部とされる。絶対地理論は地球の形體・大きさ・運動・位置・實質・海陸分布・山岳・森林と砂漠・水界と氣界等を取扱ひ、相對地理論は緯度・氣候帶・各地間の時間の差及び一日の長さの差など、天體との關聯に於ける地球上の諸事實を論じ、比較地理論は各地域を比較することから生ずる諸事項を考察する。但しこゝで實際に取扱はれたのは、經度・各地間の距離・航海であつた。また特殊地理學は土地に關する部分即ち位置・輪廓・境界・山岳・鑛物・森林及び砂漠・水・土地の肥瘦と作物・動物等を取扱ふものと、天體に關する部分即ちその地方の上空に於ける天體とその運動・氣候を取扱ふ部分と、人間に關する部分即ち住民の身體的特徵・風俗・言語・政治・宗教・歴史等を取扱ふ部分とからなる。地理學が取扱ふ諸事項を天地人三方面に分つことは即ちワレニウスに始まつた。但し彼はこの人間に關する部分を「斯學に屬せしめることは適切ならざるが如くではあ

るが、尙從來の慣はしにより、且つ讀者の案内にもなること故に、岩波講座地理學、小野鐵二、西洋地理學史、二八頁(これを認めたのであつた。彼に従へば地理學は地球の形狀・大いさ・運動などを取扱ふものであり、各地居住民に關する諸事實の如きは、本來斯學の領域に屬せざるものと考へられた。斯くして彼の一般地理學は、眞に地理學に非ずして一般地學なりとする見解も生ずるのであるが(Alfred Hettner, Die Geographie: ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden. Breslau, 1927. S. 64 参照)それにも拘らず彼が斯かる體系を地理學に與へたことは、地理學史上一時期を劃するものであり、この體系づけは、Isaac Newton がケムブリッジ大學の學生の爲めに彼の書を一六七二年に複刻して以來約一〇〇年間、英國・佛蘭西・和蘭等の地理學者の踏襲するところとなつた。

ワレニウスの功績はこれに止まらなかつた。彼は元來アリストテレス及びプロトレマイオスの流れを汲むものであつたが、しかも彼はプロトレマイオス流の量的測定から更に進んで質的觀察及び諸現象の成因の考察を行つた。諸種の自然現象の觀察と共に、常にそれ等の成因が、彼の豊富な科學的知識に基き、神學の見地を全く離れて嚴正な學問の見地から考察された。その結果として彼の地理學は、その後一〇〇餘年にわたつて海洋學・氣象學・地形學等の基礎となり、彼は自然地理學(Physische Geographie)の建設者と稱せらるゝに至つた。(Hermann Wagner, Allgemeine Erdkunde. II. Auflage. I. Teil. Hanover 1938. S. 31)

他方に於いて地理學理論の基礎となり或は研究調査の手段となる諸學術は、この時代に多數學者の努力に依つて著しき進歩を遂げた。即ち René Descartes (一五九六—一六五〇年) Blaise Pascal (一六二三—一六六二年) Isaac

Newton (一六四二—一七五二年) Godfried Wilhelm Freiherr von Leibnitz (一六四六—一七一六年)等の碩學が輩出して、物理學・數學・天文學等の諸方面から最も根本的な貢獻をなすと共に、天文學に於いては Edmond Halley (一六五〇—一七四二年)があり、地質學に於てはその始祖と稱せらる Nicholas Steno (一六三八—一六八六年) John Woodward (一六六五—一七二八年) William Whiston (一六七七—一七五二年) 動植物學に於いては John Ray (一六二九—一七〇五年) Joseph Piton de Tournefort (一六五六—一七〇八年) René Antoine Ferchault de Réaumur (一六八三—一七五七年) Carl Linné (一七〇七—一七八年) Johann Georg Gmelin (一七〇九—一七五五年)があり、更に氣象學者としてまた溫度計の完成者として著名なる Gabriel Daniel Fahrenheit (一六八六—一七三六年) 氣壓と溫度・高度の關係を明かにした Edmé Mariotte (凡一六二〇—一八四年) Robert Boyle (一六二七—一七〇九年)等があつた。従つてまた測地學・測量術も著しく進歩し、極めて正確な地圖が作製されるに至つた。殊に佛蘭西に於ては、王室の保護獎勵の下に Giovanni Domenico Cassini (一六二五—一七一二) Jean Picard (不詳) Nicolas Sanson (一六〇〇—一六七七年) Guillaume Delisle (一六七五—一七二六年) Jean Baptiste Bourguignon d'Anville (一六九七—一七八二年) César François Cassini (一七一四—一八四年)等が、三角測量法・天體觀測に依る經緯度測定法・水準測量法等に依つて、或は佛蘭西國內の正確な地圖を作り、或は遠くラップランド・南米・レヴァント地方等に觀測旅行を行つて地球の眞の形體や各地の正確な經緯度を明かにし、更に或は優秀な世界地圖や各國地圖を作製した。これ等の地圖は前世紀に和蘭を中心として繁昌したメルカトルその他の地圖製作業者のそれに比して、全

く面目を一新するものであつた。前者はむしろ美術的商品として製作販賣され多くの不正確さを含むで居たのに對し、後者は嚴格に斯かる不正確さの一切を排除し、最新の測量技術に基いて製作されしかもその目的は販賣の爲めでなかつた。

斯かる差異はまた探險旅行の上にも見られた。即ちこの時代の探險旅行のうちには、科學的調査を行ふものが多く現れるに至つた。勿論 Robert Covelier de La Salle (一六四三—一七八七年)の北米探險(一六七九—一七八七年)の如き政治的目的に出づるものは多かつたが、他方 Vitus Behring (一六八〇—一七四一年)の二回にわたる探險旅行、博物學者グメリン・天文學者 Delisle de la Crouaère 及び歴史家 Gerhard Friedrich Müller (一七〇五—一八三年)等に依るシベリア調査旅行(一七四〇年前後) La Condamine のペルーへの觀測旅行とアマゾン探險(一七三六—一七四三年)等の如き、科學的調査を主とするものも少くなかつた。これ等の探險はいづれも詳細な記録を残したことは云ふまでもない。例へば右のシベリア探險の收穫として、シベリアの全貌を示す正確な地圖が露西亞帝國學士院から出版(一七四五年)されたし、ミュラーの大著「シベリア帝國及び國內事件記」(一七五〇年)グメリンの旅行記(一七五一—一七二年)及びその蒐集資料に依る Flora Sibiriae (一七四七年)ベリリングに隨行した Steller の視察記(一七七四)年等が現れた。(バルトリド著外務省調査部譯「歐洲殊に露西亞に於ける東洋研究史」昭和二年刊、四〇三八頁參照)

然し乍らこれ等探險旅行も重い國家的使命を荷ふものであつた。即ちこれ等は各國の領土擴張・植民地開發等の

政策遂行に寄與せしめられたのであつて、前掲のシベリア探險がピートル大帝及びエカテリナ女帝の命の下に行はれたが如き、佛蘭西に於ける多くの地理學的研究が王室の保護下にある Académie Française (一六三五年創立、一六六六年に Académie des Sciences として公認さる)に依つて行はれたが如き、まさにこの事實を物語る。前記のライコンダミンの觀測旅行も、アカデミーからラップランドとペルーとへ多數の學者が派遣され、數ヶ年にわたる觀測の結果、地球の短軸回轉橢圓體なることが確認された際その一員としての旅行だつたのである。英國では一六六六年頃チェームズ一世が計畫して實現しなかつたが、一六六二年チャールズ二世の下に Royal Society of London が公認され、露西亞ではピートル大帝の計畫を承繼したエカテリナ女帝の下に帝國學士院が生れた。(一七二五年)斯くの如く當時の最強國は、一方に於いて學術の振興をはかると共に他方に於いては、英國・和蘭及び佛蘭西等の東印度會社の如き強大なる組織を以つて通商・探險等に從事せしめ、更にライサールの如き個人的探險に大なる援助を行ふ等の方法に依つて、激烈な國際的競争に打勝ち國力の隆昌をはからうとした。斯くして地理學は一方に於いてこれ等國家活動に貢献せしめられると共に、他方に於いて一般學術獎勵及び探險旅行の獎勵に依つて、國家活動から二重の刺戟を受けたのである。

ワレニウスの死後凡一〇〇年を隔て、この時期に於ける最も重要な地理學理論が Immanuel Kant (一七二四—一八〇四年)に依つて提示されたのは、右の如き時代を背景としてあつた。カントは一七五七年以降二〇年間ゲーティスベルク大學に於いて自然地理學を講義したが、彼は先づ地理學を次の六分科に分けた。即ち自然地理學・數理

地理學・道德地理學・政治・地理學・商業地理學・宗教地理學である。自然地理學は自然界の要約を行ふもので、歴史學の基礎たるのみならず總べての可能なる地理學分科の基礎とされる。それは地球とそれに屬する一切のもの即ち水・空氣・土地を取扱ふ一般部門と、人間・動植物・礦物等の地球の生産物を扱ふ特殊部門とから成る。數理地理學は地球の形體・容積・運動並びに太陽系に於けるその位置を取扱ひ、道德地理學は地方の相違に従つて居住民の風習・性格の相違する事實を、政治地理學は自然の相違に従つて政治上の相違ある事實を取扱ひ、商業地理學は各國各地の生産物過不足が何故にまた何處から生ずるかを取扱ひ、宗教地理學は土地の相違に伴ふ宗教上の相違を取扱ふとなした。(Immanuel Kant, *Physische Geographie. Zweite Auflage.* Hrsg. von P. Gedan. Leipzig 1905. S. 16-7. 40. 参照) カントは地理學を以つて、希臘語の語源をその儘に地の記述をなすものと考へ、歴史が時間的秩序に従ふ記述であるに對して、これは空間的秩序に依る記述であり、これ等兩者と人類學とに依つて吾々の世界認識を完からしめると説いた。(Ibid. S. 6-16. 参照) これは即ち地理學の學問領域を明かにし、しかもワレニウスより遙かに進んだ見解を示したものと云ふべく、ワレニウスの地理學は事實上地學に過ぎなかつたのに對して、カントの地理學は上述の如く社會現象を取扱ふ諸分科を含むで居る。しかも右の六分科のうち當時までに著しき發達を遂げたのは自然地理學及び數理地理學の二分科のみであつたのだから、これ等諸分科を認めたこともカントの重要な功績と云つて宜い。恐らく當時までの人類學・動植物學の進歩と通商・探險旅行等に依る各國の政治及び經濟事情の判明とが、博學なカントに依つて綜合された成果であらう。殊に商業地理學なる分科を認めたことは、まさにマーカントイリ

スムの時代を反映せるものと云ふべきである。この他のカントは *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels* (一七五五年) その他の著述を通じて、地理學の進歩に貢献するところも大きかつた。

斯くの如くカントに依つて地理學の領域が明確に規定されたが、他方に於いて地理學の實質を構成する諸研究も、ワレニウス以後一〇〇年間の時期に於ける盛況を凌ぐ收獲が齎された。唯數理及び自然地理學概論に於いて著しき進歩を見ず、最も重要な和蘭人 Jan Lulofs の *Inleiding tot eene natuur-en wiskundige beschouwing des aard-kloots* (一七五〇年 *Anleitung zu der mathematischen und physischen Erkenntnis der Erdkrugel* 一七五五年に獨譯さる) もワレニウスに依存するものであつたが、地誌の方面に於いては Anton Friedrich Büsching (一七二二—一七九三年) の *Neue Erldbeschreibung* (一七五四年) Johann Chr. Gatterer の *Abriss der Geographie* (一七七五年) 等の注目すべき著作が現れた。ピュッシンクは從來の一般地誌著述に於ける慣行であつた先人の著書にのみ依據する方法を止めて、地理的及び統計的資料に基き各國の地誌を記述し、地誌なるものに新しい生命を與へたので、その後一七八八年までに八版を重ねたし、その以後一九世紀前半に至るまで多くの地誌的著述の手本ともなつた。ガッテラーの地誌はまた山岳・河川等の詳細な觀察を含み、從來の如く國境を以つて地域的限界とせず、山岳・河川等に境せらるゝ自然的地域を地理的統一體として記述した點に於いて、やはり地誌の進歩に一時期を劃するものであつた。更に地質學の方面に於いては、獨逸地質學の祖と稱せらる Abraham Gottlob Werner (一七五〇—一八一七年) 及びその岩石水成論に對して岩石火成論を樹て論争した James Hutton (一七二六—一七九七年) があり、動

植物地理の方面に於いては、哺乳動物の世界分布圖(一七七七年)及び Geographische Geschichte des Menschen(一七七八—一八三年)等を著して動物地理學の基礎を固めた E. A. W. Zimmermann がある。また地質學及び動植物地理の兩方面に活躍した人々として、George Louis Leclerc, Buffon(一七〇七—一八八八年) Peter Simon Pallas(一七四一—一八一一年) George MacDonald Home Playfair 等を擧げることが出来る。デュッフオンは植物地理學者であると同時に地層の調査研究を行ひ、その *Epoques de la nature* (一七七八年)に於いて、大地の歴史に對する最初の試みを行つた。パラスも露西亞・中央亞細亞に旅行して植物及び地質に關する重要な調査をなし、プレーフェアは支那の植物に就いて貴重なる研究をなすと共に、地質學に於いても *Illustrations to the Huttonian theory of the earth* (一八〇二年)を著した。

次にこの時期の最も主要なる探險旅行としては James Cook(一七二八—一七九〇年)の三回にわたる世界一周航海(一七六九—一七二一年、七二—一七二五年、七六—一七九〇年)を擧げねばならない。殊に第二回航海には獨逸人 Johann Reinhold Foster 及びその子 Georg が同行し、地理學的價値の高い旅行記を生んだ點で重要である。即ちフォルシュター父子の旅行記は科學的な記述に満ちて居り、しかも前述のグメリン・デリーユ・ミュラー・ラッコングミシ・ビュッフオン等の調査が、夫々動植物學・天文學・歴史・測地學・地質學・考古學等の領域に屬したのと異なり、博く諸方面にわたつて各地域の特殊事情を敘述するに努めたのである。パラス及び後述のニールも、夫々地質學・動植物學・考古學方面の調査報告と共に、フォルシュターと同様な觀察を行つては居るが、旅行地はフォルシュターに比して遙かに限られて居た。またアフリカに於ける Mungo Park(一七七一—一八〇六年)アラビアに於ける Carsten Niebuhr の探險も、共に地理的知識の擴大に重要な貢獻をなし、殊に後者の *Description of Arabia* (一七七一)年は、同地方の考古學的調査を含み極めて貴重なる研究資料となつた。

最後に、この準備期に就いて見落すことの出来ぬ事實は、Montesquieu (Charles Louis de Secondat, Baron de la Brède et de Montesquieu 一六八九—一七五五年) Johann Gottfried von Herder (一七四四—一八〇三年) 等に依つて、自然環境と人間生活との關聯が系統的に考察され、當時の啓蒙思想の一翼として大なる影響を思想界に與へたことである。モンテスキューは *De l'esprit des lois* (一七四八年)に氣候その他の自然的條件が社會制度を規定する關係を論じ、ヘルダーはその *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit* (一七八四—一七九一年)に於いて、人類の歴史的過程が自然的條件に於つて規定される關係を論じたが、斯かる思想の萌芽は古代にこれを求めることが出来るし、地理學者の間には殊にストラボンに於いて顯著であつた。(本誌、昭和十四年九月號所載の拙稿、四九頁参照)然るにこの思想は地理學者に依つて、發表せしめられぬ以前に、社會理論家・歴史理論家の手に依つて發展を見るに至つた。既に一六世紀にも Jean Bodin (凡一五三〇—一五九六年)の *Six livres de la république* (一五七七年)に於いて國家理論として展開されて居たが、彼の理論はポリビオス・ストラボン等から出發したものである。斯くしてこの思想が啓蒙時代の最盛期に於いてモンテスキュー・ボーゲン等の有力な代辯者を見出すに及び、逆に地理學理論に重大な影響を與へるに至つた。若しカントにして社會現象に關する地理學分科の研究を行

つて居たら、恐らく環境論的考察が行はれたであらうが、彼がその方面に着手しなかつたので、フンボルト及びリッターの出現を待たねばならなかつた。

三 地理學成立期

一七世紀後半から一八世紀末までの凡そ一五〇年間にワレニウス・カント・ピュッシンク・ガッテラーを始めとして多數の學者に依り理論及び素材的研究の兩方面に著しき進歩を示した西洋地理學界は、遂に一九世紀の初頭に及んで同時に二人の巨人フンボルトとリッターを生み、こゝに科學としての地理學の成立を見るに至つた。換言すればこの二人に依つて、これまで蓄積された夥しい研究の成果が、一つの科學として統一されたのであつた。しかもこの二人は相互に著しく異なる特色を持ち、兩者の努力が相俟つて始めてこの偉業が完成され得たと云ひ得る。斯くしてこの二人の活動期凡そ一八〇〇—一八六〇年を以つて、地理學成立期とする。

Alexander von Humboldt (一七六九—一八五九年) は、後にプロシアの政治家・學者として重きをなした Friedrich Wilhelm von Humboldt (一七六七—一八三五年) の弟として富裕な貴族の家に生まれ、フランクフルト・アム・オーダー・ダムブルク・ゲッティンゲンの諸大學及びアブラハム・ウエルナーの主宰するフライブルク鑛山大學に於いて、財政學・採鑛學及び諸種自然科學を學んだ後、プロシア政府に鑛山監督官として奉職したが、やがて英國及びライオン地方に旅行した。この旅行は嘗つてその父と共にクックの第二次航海に参加しその後多くの優れた旅行記を著した Georg Forster (一七五四—一七九四年) と行を共にしたのであつて、フンボルトが後に最も價値の高い旅行記を

著すに至つたのも、このフォルシュターの刺戟に基くところが大であつた。今やフンボルトは自然科學者たらんとするの決意を固め、巴里に於いて専ら氣象學の研究に従事する間に、植物學者 Aimé Bonpland (一七七三—一八五八年) と相識り、一七九九年相携へて中南米の研究旅行に出發した。斯くしてオリノコ河流域・キューバ・キイト・北部ペルー・メキシコ等を探險の後、一八〇四年佛蘭西へ歸着、蒐集資料に基く研究を巴里に於いて進めると共に、後に *Voyages aux régions équinoxiales du nouveau continent, fait an 1799-1804, par A. de Humboldt et A. Bonpland* 三〇卷(一八一六—一八三二年) に収録された旅行記を執筆し、また地學研究論文集 *Ansichten der Natur* (一八〇八年) を著した。一八二七年プロシア王の命に依つて歸國したが、二九年には露西亞政府の委託に依り動物學者 Christian Gottfried Ehrenberg (一七九五—一八七六年) Gustav Rose 等と共に、ウラル・アルタイ地方の調査旅行に赴いた。その後は伯林にあつて獨逸自然科學界の巨擘として相變らず研鑽を續け、晩年にはその畢生の大著 *Kosmos, Entwurf einer physischen Weltbeschreibung* (一八四五—一八六二年) を著した。

ところでフンボルトは地理學理論も書かなかつたし、體系的な地理書も著して居ない。のみならず彼は、その研究旅行を以つて、「訪問した國々の事情を傳へたかつたことと、世界自然史・地球理論或は自然地理學 (Physical Geography) として曖昧に呼稱されて居り、吾々がまだその輪廓を殆んど把握して居ない一科學を闡明するに適した事實を蒐集すること」の二重の目的を持つものと述べて居り (Personal narrative of travels to the equinoctial regions of America during the years 1799-1804, by A. von Humboldt and A. Bonpland. Written in French by

A. v. Humboldt, tr. and edited by Thomasina Ross. London, 1870. Vol. I. pp. IX-X.) 更に彼の終生の目的が「宇宙論」の著述にあつたのから見て、彼が純粹に地理學建設に努力したとは云へぬと思はれる。然し乍らそれにも拘らず彼の旅行記は、その方法に於いて地誌として最も完全なものであり、結果から見てもまさに科學としての地理學がこれに依つて建設されたと云つてよいものであつた。先づ第一にそれは當時の最高水準の自然科學的知識に依る觀察から成つて居る。例へばフンボルトは平均等溫線圖を用ひて氣候學の進歩に貢献し、また中南米に於ける標本蒐集や *Ideen zur einer Geographie der Pflanzen* (一八〇〇年頃) *Prolegomena über die Verbreitung der Pflanzen* (一八一五年) その他の著述に依つて植物學・植物地理學の進歩に貢献し、その他博く動物學・氣象學・礦物學・地質學・測量術等にわたつて十分な知識を持つて居た。第二には彼が一地域に於ける多種多様の現象の間に密接な關聯の存することを認め、斯かる見地から諸現象の分布状態に因果論的説明を與へたことである。即ち彼は「宇宙論」第一卷に於て自然界の諸現象間に於ける關聯を説き、地誌的研究に諸種科學の應用が必要なことを強調して、「自然地誌 (*Physische Erdbeschreibung*)」最高の目標は、「既に上述せる如く、多様性の中に統一性を認識すること、即ち地上の諸現象間に於ける共同關係と内部的關聯の探究を行ふことである」と述べて居るが (Kosmos, S. 55) この思想はその中南米旅行記に於いて既に明かにされて居る。(前掲英譯本 P. X 參照) 斯くして彼はその豊富なる學殖を驅使して各地域の特定種類の自然現象を常にその地域の他種自然現象との關聯に於いて考察すると共に、一地域の現象を世界全體に對して比較することに重きを置いた。このことは即ち諸現象の分布状態に因果論的説明を與へ

ることであり、一地域の諸現象を一つの全體として結合せしめることを意味し、從つてまた地域性の把握を意味する。而して斯かる見解は社會現象へも及ぼされ、自然と人間との關係が考究される。換言すれば環境論的考察に到達したのであつた。彼の旅行記が地誌として完全だといふ第三の理由として、その記述が自然現象のみならず政治・經濟等の社會現象に及び、殊に各地の農業事情や土人の状態に就いて詳細なる記述を行つて居る點を擧げることが出来る。(Hettner, a. a. O., S. 84, 85-6, Peter H. Schmidt, *Wirtschaftsforschung und Geographie*. Jena, 1925. S. 71-8. 參照)

斯くしてフンボルトの業績は、地理學理論の考究及び體系的な地理書の著述には缺けて居たが、所謂人文地理學・經濟地理學・政治地理學・植物地理學・動物地理學等、地理學諸分科の廣汎な領域を蔽ひ、しかも彼の博識に依つてその夫々の發達に貴重なる貢獻をなし得たのであつた。

Karl Ritter (一七七九—一八五九年) はフンボルトと異なつて、その一生を主として書齋及び講壇に過ごした學者であつた。ハレ及びゲッティンゲン兩大學に學び、ベートマン・ホルヴェット家の家庭教師として二〇年間を過ごしたが、その間一八〇七年に中南米旅行から歸つたフンボルトと會ひ、地理學研究に志すに至つた。一八一七年にその主著 *Die Erdkunde im Verhältnis zur Natur und zur Geschichte des Menschen oder allgemeine vergleichende Geographie als sichere Grundlage des Studiums und Unterrichts in den physikalischen und historischen Wissenschaften*. 2 Bände. を著し、一八二〇年に柏林大學の地理學教授となり、生涯その位置を動かさなかつた。そ

の間歐洲各地に旅行するを得、更に研究を續けた結果右の著書に大なる補足を行つて、一九二二年より老大な第二版の出版に着手したが、五九年までに十九卷上梓されたに拘らず、地誌的部分はアフリカとアジア篇のみに終つた。

リッターは地理學の理論的考察を行ひ、その理論に基いて從來の夥しい素材的研究を整理し統一して、所謂比較地理學的研究を展開した。彼は從來の地理的研究が實際生活への效用のみを主眼として居たのに對して、純粹な科學として研究すべきことを主張し、斯學の領域を次の如く規定した。即ち *Das historische Element in der geographischen Wissenschaft* (一八三三年) に於いて、歴史が事件の時間的繼起關係を取扱ふに對して、地理學は地域性の空間的並存關係を取扱ふとなしたのであつて、これはカントの説いたところと地域性なる概念を導入した點で異なるのみである。(Kant, a. a. O., S. 12. 及び岩波講座地理學、小牧實繁「歴史地理學—地理學の立場から—」昭和八年刊、二九頁參照) この地域性の概念は一地域をそこに分布する諸現象の總體の統一的全體として把握する場合に生ずるのであつて、既にフンボルトに依つて認められて居たのであるが、リッターは更にこれを強調したのである。而して彼はやはりフンボルトと同様に地域的比較の必要なるを主張して、その地誌的研究を「比較地理學」と稱した。

リッターはまた環境論を以つて地理學に於ける指導的理念とし、殊に水平的及び垂直的地表編制が人類の歴史に及ぼす影響を重視した。然し乍ら彼の環境論はフンボルトのそれと著しく異なる。即ちフンボルトの場合には自然環境が自然科学的な因果關係に於いて人間生活にも影響するのであつたが、リッターに在つては、自然は人間の修

業所であり、其處で神の設け給ふた計畫の下に人類の歴史的過程が進行するのである。

世界は一つの有機體をなし、人間と自然とは精神と肉體との關係にあると考へるが、然し自然は人間の爲めに神の作り給ふたものであり人間生活を條件づけるものであるから、自然と人間との關係に於ける環境論的考察は重要であつても、自然現象相互間の因果關係を考察することは重要でなくなる。斯くしてリッターの研究は、全體として社會現象に重きを置き、後の人々から人文地理學の建設者と稱せられることになつた。彼は自然科学的な調査を行ふこともなかつたし、また個々の地域の直接的な觀察を行ふことにも重きを置かなかつた。前者の代りには過去の諸研究を整理しその資料を嚴密に吟味すること、後者の代りには個々の地域よりも一層包括的な歴史的展望を行ふことに重きを置いた。これ等すべてが要するにリッターの宗教的な目的論的な環境論に基くことであつた。(Herzner, a. a. O., S. 84, 86-7 Schmidt, a. a. O., S. 78-86. 參照)

斯くしてフンボルトに缺けて居た理論的考察及び體系的地理研究をリッターが提供し、リッターに缺けて居る自然現象の直接的觀察をフンボルトが行つて、こゝに兩者の努力に依り近代地理學の形式が完備した。また内容に就いても、リッターの著しい人文地理的傾向に對して、フンボルトの諸種自然現象に對する地理學的研究がこれを補足して居たと云ひ得る。

フンボルト及びリッターの二人は共に近代地理學の祖であるが、所謂リッター學派が生まれたにも拘らず、フンボルトからは學派と稱すべきものが生まれなかつた。然し乍らフンボルトの貢獻に依つて諸種地理學分科乃至は氣

候學等が発達したことは云ふまでもない。要するにこの二人の影響は共に極めて大きく、それは單に地理學界に止まらずして、他の學問或は實生活に及んだ。例へばリッターの史觀は歴史家 Heinrich Leo (一七九九—一八七八年) Ernst Curtius (一八一四—一九〇六年) Maximilian Duncker (一八一—一八六六年) 經濟學者 Wilhelm Roscher (一八一七—一九〇四年) Karl Gustav Adolf Kries (一八二—一九〇八年) 等に影響を與へ、フンボルトの旅行は獨逸の植民活動を刺戟したと云はれて居る。(Hettner, a. a. O., S. 84. Encyclopaedia of Social Sciences, Vol. VIII, p. 549. 参照)

フンボルト及びリッターの活動期即ち一九世紀初頭から六〇年頃までの時期はまた、この二人以外にも多數地理學者の活動期であり、斯學の各方面に於ける輝かしい進歩の時期であつた。氣象・氣候方面の研究者としては Heinrich Wilhelm Dove (一八〇三—一七九九年) があり、植物地理學に於ては August Heinrich Grisebach (一八一四—一七九九年) 動物地理學に於ては Andreas Wagner, Schmarda, Alfred Russel Wallace (一八三—一九一三年) 地質・地形の方面では Christian Leopold von Buch (一七七四—一八五三年) Charles Lyell (一七九七—一八七五年) Elie de Beaumont (一七九八—一八七四年) 及び古生物學の創始者 Georges Cuvier (一七六九—一八三二年) があつた。地圖製作の方面では Aaron Arrowsmith (一七五〇—一八三三年) Heinrich Berghans (一七九七—一八八四年) Heinrich Kiepert (一八一八—一九〇九年) August Petermann (一八二—一七七八年) 等があつた。また歴史地理的研究がリッターの影響に依つて刺戟され Mendelssohn の Germanisches Europa (一八三六年) ツルテノースの

Peloponnes (一八五—一八二二年) 等が現れ、やはりリッターの影響の下に、交通及び聚落地理學の建設者 Johann Georg Kohl (一八〇八—一七七八年) が *Der Verkehr und die Ansiedlungen der Menschen in ihrer Abhängigkeit von der Gestaltung der Erdoberfläche* (一八四二年) を著したことも、忘れることが出来なす。更に David Livingstone (一八一三—一七三三年) の「アフリカ探險」、Charles Sturt 及び Thomas Mitchell が豪洲奥地踏破、Edward Parry (一七九〇—一八五五年) James Clark Ross (一八〇〇—一八二二年) の北極及び南極探險等が、これ等未開地域への地理的知識の擴大に貢献したのもこの時期であつた。而してこれ等地理學上の進歩を促進する爲めに、巴里 (一八二二年) 伯林 (一八二六年) 倫敦 (一八三〇年) に夫々地理學協會が創立された。この最後の事實は一科學としての地理學が、この時期に如何に興隆しつゝあつたかを示す有力な識左と見ることが出来やう。斯くしてこの時期に於ては、單にフンボルト及びリッターの業績が孤立的に出現したのではなく、この二人を中心としその強力な影響の下に地理學界全體が旺盛な活動を示したのであつて、まさしく地理學成立期と稱することが出来やう。

四 その後の諸發展

フンボルト及びリッター以後の地理學界に於ける主要な發展は、第一に自然地理學の事實上の解體と所謂人文地理學的研究への集中、第二には經濟地理學・政治地理學等の新分科の興隆である。

人間生活を離れて氣候・地形・地質・河川海洋等を取扱つた所謂自然地理學は、これ等諸要素に關する研究が次第に發達し遂に専門科學として獨立するに及んで、事實上解體した。即ち地質學が Eduard Suess (一八三一—一九一

四年)の *Das Antlitz der Erde* (一八八三—一九〇一年)及び *Archibald Geikie* (一八三五一—一九二四年)の *Text-book of geology* (一八九六年)等に依つて大成されたのを始めとして、地形學が *Albrecht Penck* (一八五八—)の *Morphologie der Erdoberfläche* (一九〇四年) *William Morris Davis* (一八五〇—)の *Die erklärende Beschreibung der Landformen* (一九二二年)等に依り、海洋學が *Otto Krümmel* (一八五四—一九二二年)の *Handbuch der Ozeanographie* (一九〇七—一九一一年)に依り、氣候學・氣象學が *Julius von Hann* (一八三九—一九二二年)の *Handbuch der Klimatologie* (一九〇八—一九一一年)及び *Lehrbuch der Meteorologie* (一九一五年)に依つて、夫々獨立の科學となつた。斯くして自然地理學書の多くは、單にこれ等専門科學の成果を羅列するに過ぎぬ無意味のものとなつた。

他方に於いて自然地理學はまた、環境論的研究の隆盛となるに従ひ、その存在を否定されるに至つた。リッターは環境論的研究を地理學の主題と認める立場から、斯學を諸種の分科に分つことなくして終つたが、斯かる環境論の見地はその後も持續せられ、近年に於いても一九二二年の *Association of American Geographers* の大會席上當時の會長 *Harlan H. Barrows* 教授が「人類生態學としての地理學」を強力に主張したといふ事實すらある。(C. Huntington and F. A. Carlson, *The geographic basis of society*. New York, 1933. pp. 45) 斯かる見地に立つて自然現象の研究を行へば、それは嘗つての自然地理學でなく人文地理學となる。

斯くの如き自然地理學の事實上の解體に反して、人文地理學はリッター以後引續いて益々隆盛に赴いた。然し乍らその主流をなす環境論にはかなりの變化が見られる。リッターの環境論は *Oskar Peschel* (一八二六—七五年)に依つてその *Geschichte des Zeitalters der Entdeckungen* (一八五八年) *Gesichte der Erdkunde* (一八六五年) *Neue Probleme der vergleichenden Erdkunde als Versuch einer Morphologie der Erdoberfläche* (一八七〇年)に於いて批判された。ペッシェルは自然と人間との關係をリッターの如く神學的に把握することを排し、自然科學的因果關係として考察すべきことを主張した。従つて彼はフンボルト流の自然科學的研究の重要性を強調したのであるが、これには一八五九年に出版された *Charles Darwin* の *The origin of species* に於いて生物とその環境との間の偉大なる調和が論ぜられたことが、大なる影響を與へて居たのである。(Schmidt, a. a. O., S. 147-9. 参照)而してこの自然地理研究を重要視する傾向は *China; Ergebnisse eigener Reisen und darauf gegründeter Studien* (一八七七年)の著者 *Ferdinand von Richthofen* (一八三三—一九〇五年)にも共通に見られ、*リヒトホーフ* は自然地理殊に地形研究に關して重要な研究をなした。

これ等二者は共に主として自然地理的研究に専念したが、これに對して *Friedrich Ratzel* (一八四四—一九〇四年)は、人間生活に對する自然環境の影響を論ずることに終始した。またペッシェルと同時代の佛國の學者 *Elisée Reclus* (一八三〇—一九〇五年)は *Nouvelle géographie universelle* (一八七六—一九四年)に於いて、ペッシェルとラッセルの中間の立場をとつた。

ラッセルほどの *Anthropogeographie oder Grundzüge der Anwendung der Erdkunde auf die Geschichte*.

(一八八二—一九二一年) *Die Erde und das Leben* (一九〇一—二二年) *Politische Geographie* (一八九七年)等の著書に於いて、人類の分布並びに文化と環境との關聯、國家と環境との關聯を論じた。彼の環境論は環境の影響を必然的・決定的と見るものであつたが、リッターの如き神學的環境論ではなく、豊富な例證から歸納的に論じた。殊に文化の差異から地域を區劃する方法を創始したことは、彼の重要な功績であつた。彼の地理學界への影響は頗る大きく、獨・佛・英・米の諸國にラッツェルの追隨者が生じた。その主要なものは Vidal de la Blache (一八四五—一九一八年) Jean Brunhes (一八六九—一九三〇年) Ellen Churchill Semple (一八六三—一九三二)である。ブラーシエはラッツェルの環境論を修正して、環境の影響を必然的・決定的なるものと見ず、單に可能なるものと見た。(Ibid., p. a. O., 157-161. 参照)

ラッツェルの「政治地理學」から Arthur Dix, Otto Maull, Rudolf Kjellen 等に依つて政治地理學及び地政學が生れた。即ち Dix, *Politische Geographie: Weltpolitisches Handbuch* (一九二二年) Maull, *Politische Geographie* (一九二五年) Kjellen, *Satat als Lebensform* (一九二六年)等である。

また經濟地理學もラッツェルの門弟 Wilhelm Götz が柏林地理學協會雜誌に寄せた論文 *Die Aufgabe der wirtschaftlichen Geographie* (一八八二年)に於いて、始めてその學問領域に就いての理論的考察が行はれたのであるが、その後今世紀に入つて著しき發達を見るに至つた。

また聚落地理學は前掲コールの研究に依つて始めてその形を整へたが、更にラッツェルの人類地理學第二卷、

リヒトホフンの *Allgemeine Siedlungs- und Verkehrsgeographie* (一九〇八年)等に依つて一層の發達を見るに至つた。

古代及び中世に於ける地理學は、極めて不定型であり實體を把へるに苦しむものであつた。それは宇宙論・天文學から地方誌に至る雜多の異分子から成り、思辯的考察と觀察・經驗の記述とを含んで居た。而して多くの場合に於ける研究の目的は、單に未知の地方の事情を知る(この言葉の最も素朴な意味に於いて)ことであり、不可思議な自然現象に説明を與へることであつた。近世に至つてこれ等雜多の異分子は次第に振り棄てられ、觀察・經驗の記述に集中し、未知の地方の事情を知るといふことは即ち地域性を知るといふ意味を持つやうになり、斯くして地理學は科學として成立したと考へられる。然し乍ら事實は然く簡單ではない。現實に於いて、地理學(Geographie)なる名稱の下に今日次の如き多方面の學問領域が包含されて居る。即ち Viktor Kraft und Felix Lampe, *Methodenlehre der Geographie*. Leipzig, 1929. に於いてクラフトが指摘するところに依れば、(S. 3-4) 一、地誌(Länderkunde)及び國家誌(Statenkunde) 二、地形學(Morphologie) 三、海洋學(Meerskunde, Oceanographie)及び水系學(Hydrographie) 湖沼河川に對するもの 四、氣候學(Klimatologie) 五、植物地理學(Pflanzengeographie)及び動物地理學(Tiergeographie) 六、人文地理學(Anthropogeographie) 聚落地理學・經濟地理學・交通地理學を含む。七、歴史地理學(historische Geographie) 八、地圖學(Kartographie) 九、天文(數理)地理學(astronomische oder mathematische Geographie)及び測地學(Geodäsie)にして一〇、地球物理學概論(Übersicht über die Geophysik)をも多分含むであ

らうと云つて居る。斯くして今日の地理學は、現實に於いて未だに斯かる廣汎な領域を含むものと解せられて居るのである。勿論このことは地理學なる概念の規定に關して、意見の不一致が存することを示して居り、要するに地理學は未だ學問として發達の途上にあり成型期にあると云はねばなるまい。

獨逸騎士團について

—その成立・活動・衰退—

高村 象平

中世後期の北歐——バルト海地方の政治・經濟史上において、めざましい行動と發展との跡を印したものに、獨逸ハンザと獨逸騎士團とがある。この二つのものの成立の起源は同じではない、端的にいへば、前者は、北獨逸商人の外地における交易權益を確保する爲めの經濟團體として成立し、後者は、第三次十字軍の副産物として、異教徒克服の任務を帯びた宗教團體として生誕したのである。然しその直接の發生地盤は異にするものの、シタウファア王朝以降における獨逸民族勢力の東北方進出といふ局面において、兩者は相結ばれてゐるのであり、夫々の活動は謂はゞ相互補完の關係にたちつゝこの大運動を展開して行つたのであつた。

但し獨逸東方植民運動に協力したといつても、それは兩者が恆に協同的立場を持したといふ意味ではなく、更に兩者時を同じうして東北歐への進出を開始したといふのではない。前者は後に關説するところであるから、暫く措